

No.	号	執筆者等	思い
1	創刊号	大石嗣郎	…。しかし、現在、日本の行き着く路線が見方によって戦前以上に多くの危険を孕んでおり、再び自らの選択によって国民の大部分の意志に逆らって進もうとしています。(機関誌不戦1988年創刊号)
1	創刊号	山内武夫	…。だから、戦後体制の犠牲にされた戦争世代の「元兵士」としては、この「民主主義」を絶対に守り培っていかなければならないし、それが戦争で逝った幾百万の将兵と民間人の死を無駄にしない道だと考えます。(機関誌不戦1988年創刊号)
1	創刊号	小沢一彦	私たちは、いまこそ「真の戦争体験」の生き証人として、これらの次代を背負う子や孫に、私たちの遺産として「戦争の恐ろしさ、空しさ」を伝承し、平和の灯をかかげていきたいと思っています。(機関誌不戦1988年創刊号)
1	創刊号	坂入浩一	私は、多くの戦友の霊が祀られている靖国神社に参拝することで、心の安まる思いがする。しかし、参拝はあくまでも個人の心情の問題なのである。参拝を政治的に利用しようとするのは、当初藩閥政治が政治的意図をもって作った虚構に乗ぜられることになり、とりもなおさず「英霊」の本意ではあるまいと思うのである。(機関誌不戦1988年創刊号)
1	創刊号	小島清文	米国では先に述べたように、…。お互いのコンセンサスの中でその社会は動いている。しかし、いまなお日本の教育界や一般社会にあるものは、一つの型、一つの考え方に対する文句のない服従、という昔ながらの図式である。しかも驚いたことに、それが「民主教育」だと大手を振って歩いていることだ。(機関誌不戦1988年創刊号)
1	創刊号	呉藤武彦	私は、特別操縦見習士官第1期生で、1944年8月に三重県鈴鹿で第100飛行団103戦隊として編成された部隊に配属され、亀山、伊丹、都城、そして知覧と移動していった。機種は97戦、1式戦、4式戦といった戦闘機集団で、B29迎撃部隊であった。(機関誌不戦1988年創刊号)
1	創刊号	小島清文	政府からも軍の中枢からも見捨てられて、武器も食糧もなく、ただ、ジャングルを奥へ奥へと逃げ惑ったあげく、兵たちが辿りついた「名誉の戦士」がこれであった。これがルソン北部やクラーク西方高地の山中で繰り広げられた地獄絵図であり、少なくともその一部である。それはまさに兵たちに対する国家指導者の大罪ともいうべきものである。(機関誌不戦1988年創刊号)